

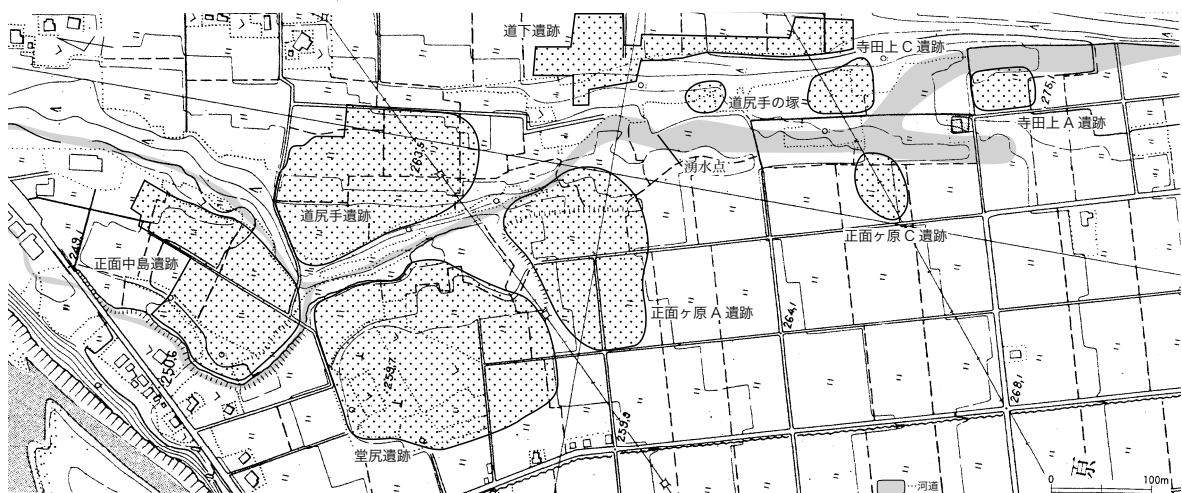
第 2 節 集落構造について

1. 道尻手遺跡の立地と集落構造

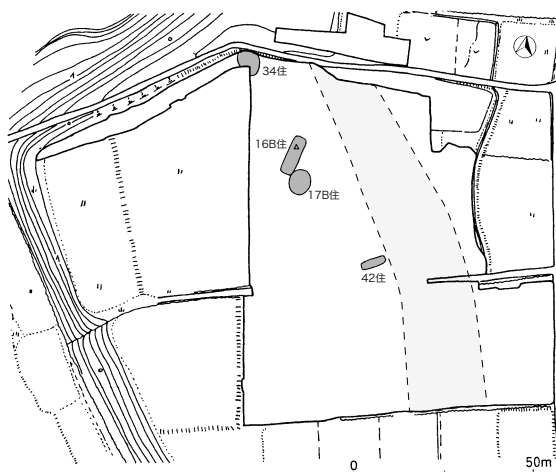
本遺跡は貝坂段丘の縁辺に立地しているが、この周りには縄文時代の遺跡が幾つか隣接している（第 129 図）。南側には前期末～中期初頭の集落遺跡である道下遺跡があり（註 250）、西側に中期前葉の堂尻遺跡（註 251）、南西側には縄文時代晩期の大規模集落である正面ヶ原 A 遺跡（註 252）がある。本遺跡は中期前葉～後期中葉にわたって大規模な集落が形成されており、途中で短期的な断絶があったとしても、他の遺跡に比べて長期間にわたって占地されている。このことから、この区域は居住に適していた場所であったと推定される。このような拠点集落が形成される条件としては、占地のための広い空間、水（小河川や湧水）、動植物資源の有無、石材・粘土などの資源の有無、周辺地域へのアクセス、などの諸条件が挙げられる。本遺跡の場合、南側にある湧水点がその一つの要素として考えられる。沖ノ原遺跡も自然湧水の脇に環状集落が形成されており（註 253）、重要な要素であることは明らかである。

このような場所に立地する道尻手遺跡の検出遺構の分布は第 130 図のように変遷する（註 254）。しかし、これらの集落変遷は、編年の時間幅の問題を別にしても、当時の集落形態を正確に反映するものではない。その要因として幾つか挙げられる。一つは調査範囲の問題であり、集落の半分ほどの区域を調査したにすぎず、未調査区の状況が不明であること。二つめは遺跡の遺存状態の問題であり、昭和 30 年代の水田造成による削平や石の抜き取りなどの破壊が見られる。加えて、縄文時代の長期にわたる占地のため、竪穴住居の構築などの諸活動によって攪乱や削平が繰り返されている。これらの要因によって住居跡などの遺構が不明瞭になった可能性が想定される。これは調査区内で検出された多数の柱穴状の土坑が存在することからも明らかである。このような前提をもとに本遺跡の集落変遷を検討する。

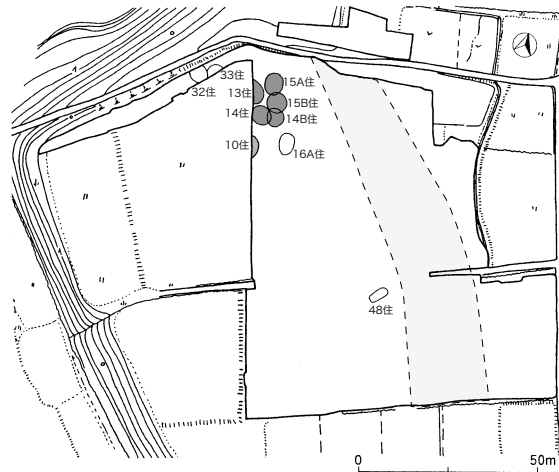
本格的に環状集落が形成されるのは、Ⅲ期（大木 7 b 式並行期）からである。これは五丁歩遺跡（註 255）や清水上遺跡（註 256）の開始時期とほぼ同時期である。住居跡は 4 軒、フラスコ状土坑 1 基が検出されている。集落の造営と同時に、旧川道の窪地に土器・石器やおそらく有機物などの廃棄によって廃棄場が形成される。この旧河道は堆積土の自然科学分析から、この段階にはすでに水の流れはなかったという分析結果が出ている（註 257）。この時期の住居形態は、円形の住居（17B 住・34 住）と長方形



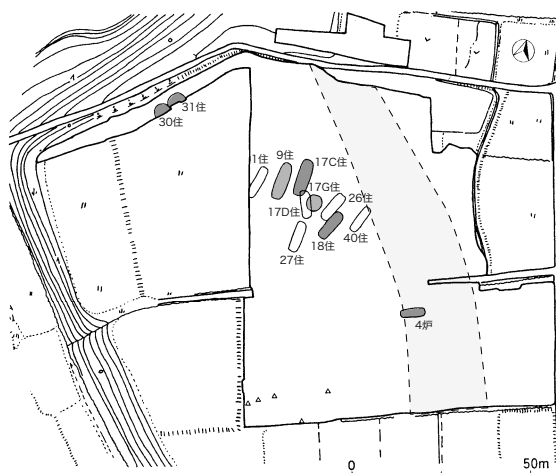
第 129 図 道尻手遺跡の立地



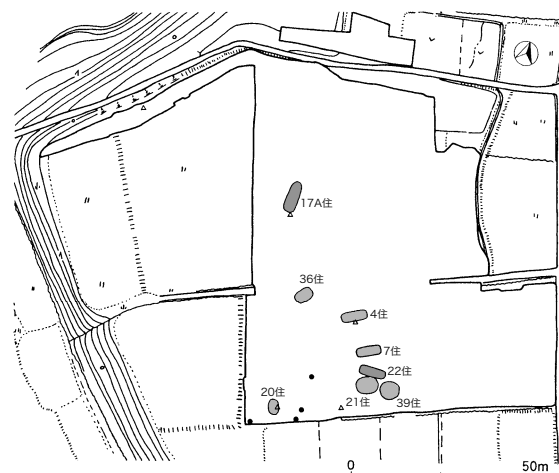
1. III期（大木7b式並行期）



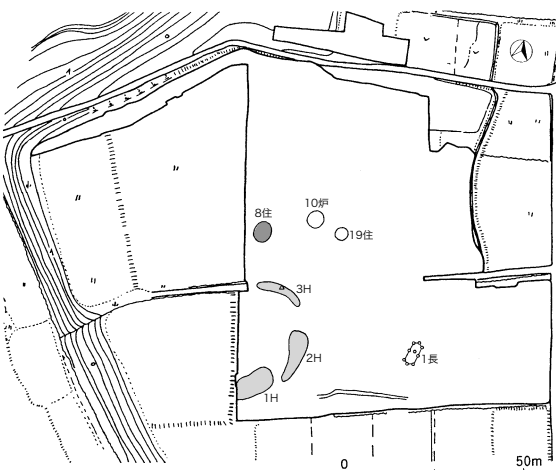
2. IV期（大木8a式並行期）



3. V期（大木8b式並行期）



4. VI期（沖ノ原式期）



5. VII期（三十稻場式期）



6. VII・IX期（南三十稻場式～加曾利B1式並行期）

- | | | |
|--------|---------|------|
| 住居跡 | 埋設土器 | 配石遺構 |
| 長方形柱穴列 | フラスコ状土坑 | 廃棄帯 |

- <凡例>
- | | |
|--|-----|
| | 古段階 |
| | 新段階 |

第130図 道尻手遺跡の集落変遷図

住居（16B 住・42 住）が認められ、両住居形態が並存して集落が構成されていたと考えられる。これらは調査区の北側に分布しており、住居跡の主軸方向には中央広場と想定される区域への求心性が見られる。この時期は出土遺物量に比べて検出遺構が少ない。また西方約 300 m の段丘が 1 段下がる正面面には堂尻遺跡があり、当該期の住居跡が 3 軒確認されている。これらは道尻手遺跡における集落の一部を構成していた可能性がある。これは集落の範囲の問題と関連し、幾つかの集落遺跡で小谷や小河川を挟んで集落が展開する事例があり、集落の範囲を考える上で重要である。

Ⅳ期（大木 8 a 式並行期）は前段階に引き続いて環状集落が営まれている。この時期は住居跡が 11 軒（10 住・13 住・14A～C・15A・B 住・16A 住・32 住・33 住・48 住）検出され、調査区の北側に分布がまとまっている。これらの多くが卵形住居跡であり、48 号住居跡のみが長方形住居跡である。これらの主軸方向はおおよそ南北軸にまとまるが、中央広場に求心性を示しているとは言えない。この時期のフラスコ状土坑や墓坑も明確ではない。出土土器はこの時期が最も多いが、検出された遺構は比較的少ない。これらの住居跡のほとんどは大木 8 a 式並行期でも古段階に属し、新段階の事例は 10 号住居跡のみである。また周辺からは一段低い正面面の正面中島遺跡の谷沿いから土器が出土し、堂尻遺跡の 11 トレンチから当該期のフラスコ状土坑 1 基が検出されており、本集落が一段低い段丘面（正面面）まで及んでいたことが明らかである。

Ⅴ期（大木 8 b 式並行期）も継続的に環状集落が造営されている。住居跡は 13 軒検出され、円形の住居跡は 4 軒（17G 住・30 住・31 住・6 炉）、長方形住居跡は 9 軒（1 住・9 住・17C 住・17D 住・18 住・26 住・27 住・40 住・4 炉）である。住居跡は、Ⅲ・Ⅳ期に比べてより内側に分布する傾向があり、主軸方向は中央広場に求心性を示している。しかし、第 17D 号住居跡のように異なった方向を向くものもある。この時期も廃棄帯への廃棄行為は継続されるが、第 4 号炉のようにこれらの範囲内に住居が構築されるようになる。このことから廃棄帯が廃棄場所といった限定された空間では、なくなり始めた可能性がある。この他にフラスコ状土坑が 5 基確認され、比較的調査区の南側にまとまる傾向がある。墓坑と推定されるものは K5－P5 などがある。この時期は周辺遺跡を含めて遺跡数と住居跡数が最大になる時期である（註 258）。

Ⅵ期（沖ノ原式期）は、8 軒の住居跡が検出され、複式炉を有する住居（20 住・21 住・36 住）と長方形住居（4 住・7 住・17A 住・22 住）がある。これらは H 5・I 5・J 5・K 5 グリッドにまとまり、17A 号住居跡のみがやや離れた場所に位置している。これらはⅤ期に比べて環状集落のより内側に分布するようになり、中央広場も径約 30 m 前後と推定される。住居跡の主軸方向は、前段階までと同様に中央広場への求心性を示している。また埋設土器のうち 4 基が中央広場の周囲に分布している。これら的一部は住居に伴っていた埋甕である可能性が高いが、埋設土器 K3－P 3 は柱状礫を伴うことから埋葬施設であると考えられる。この他、フラスコ状土坑が 6 基検出されているが、集落内でのまとまりはなく散在している。墓坑の可能性のあるものは 2 基のみである。遺物の出土状況から廃棄帯への廃棄行為がほとんどなかったことを示している。これ以後、環状配置の集落構造は不明瞭になる。

Ⅶ期（三十稲場式期）は、3 軒（8 住・19 住・10 炉）の住居跡が見られるが、竪穴の掘り込みが浅いため、住居形態や主軸方向は不明である。この時期になると、長方形柱穴列 1 棟、溝状遺構 1 条、配石遺構といった新たな要素が集落を構成するようになる。しかし、これらの配石遺構の構築時期は、出土遺物からⅦ期と断定することはできないが、中期末葉の中央広場の縁辺に沿って配列することから、中期終末から

後期初頭に造営が開始された可能性がある。長方形柱穴列は、第1号長方形柱穴列以外は配列が不明なものが多い。溝状遺構は廃棄帯があった範囲から始まり、西側に延びている。この方向は地形の傾斜方向に沿っていることから、水路的な遺構であったと推定される。

VIII期（後期前葉）は、8軒（2住・3住・6住・37住・38住・41住・43住・3炉）の住居跡が検出されている。これらの遺構の分布は調査区南側に偏り、北側は遺構の空白地になる。南三十稲場式期新段階の住居は、中期集落の中央広場に当たる場所に構築されるようになり、集落構造に大きな転換が認められる。配石遺構の周辺には帯状に柱穴が重複しながら密集している。これらの構築時期は不明であるが、後期前半期のものと考えられる。これらは配列が不明なものが多いが、確認面からの深度が約0.5m～1m前後と大形で、根固め礫が伴う場合が多いことから、多くは長方形柱穴列に伴う柱穴であると考えられる。配石遺構群（1号・2号・3号配石群）は、長径約30mほどの半円状にめぐっている。1号配石群は、14基の配石墓と4基の配石から構成される。2号配石群は8基の配石墓と1基の配石から構成され、帯状に配列している。3号配石群は、立石4基と立石状の礫などが弧状に並ぶ列石であり、配石墓は伴わない。配石墓の多くは、南三十稲場式期新段階～加曽利B1式並行期に造営されたものである。これらの配石遺構群については「環状列石」の範疇で捉えてきた（註259）。しかし、南三十稲場式期新段階の住居（2住・6住・43住）が環内部に侵出することから、少なくともこの段階の配石遺構は環状列石の定義には当てはまらない。ただし、VI期（沖ノ原式期）の環状集落の中央広場に沿って配石が環状に分布することから、中期終末もしくは後期初頭に環状列石が構築されて、次第に配石墓が作られる過程で改変された可能性もありえる。

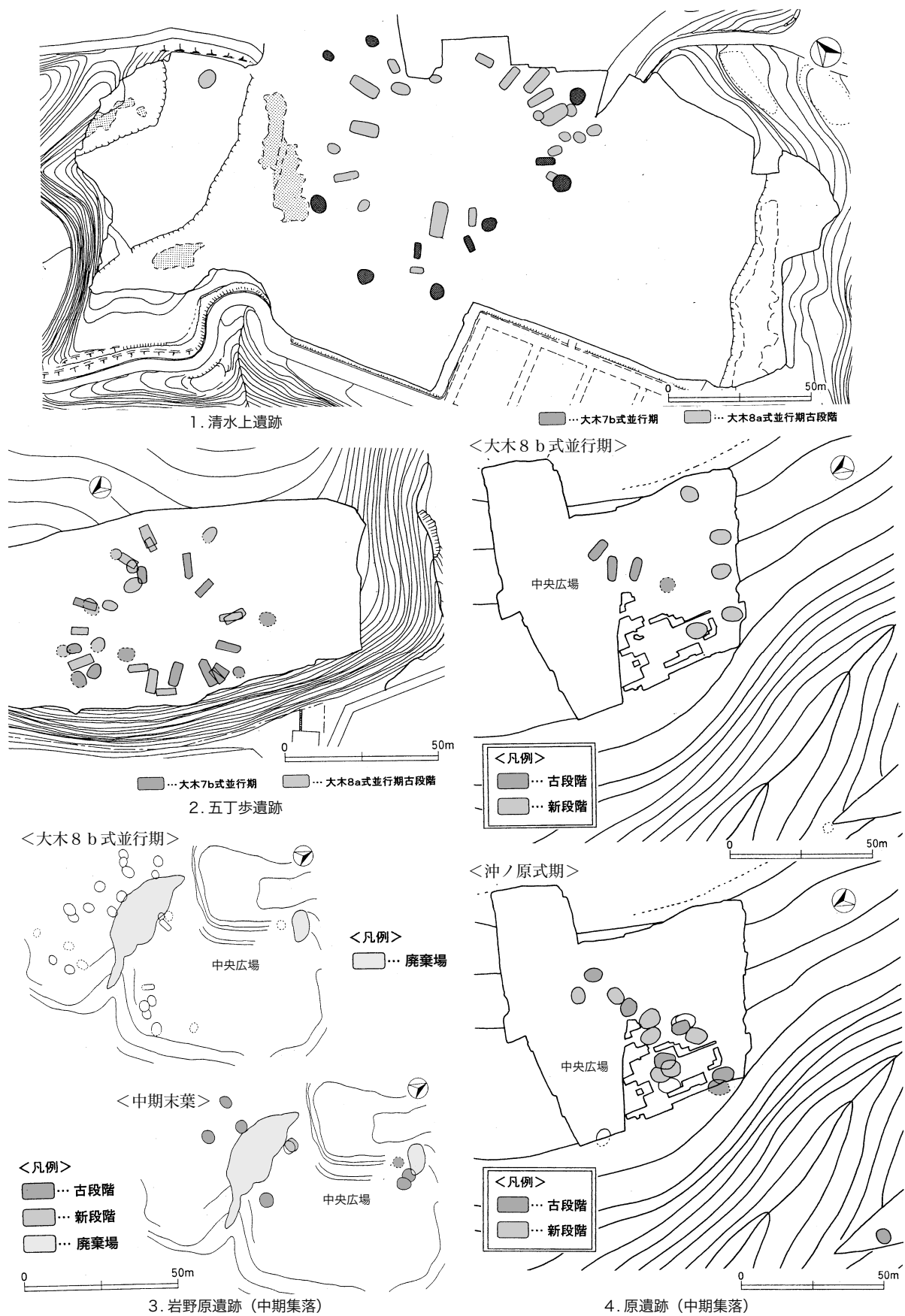
本遺跡における集落構造には、時期的な変化と特色が認められた。しかし、これらは冒頭で述べたような要因によって、多少なりとも改変されていると推定される。従って、他の遺跡と比較を行うことで、当地域における集落構造の時期的な特色を明確にしたい。

2. 周辺遺跡との比較

1) 縄文時代中期の集落構造

周辺遺跡における縄文中期集落は、拠点的な環状集落と小規模集落が認められる。明確な環状集落の事例は、津南町沖ノ原遺跡、堂平遺跡（註260）、十日町市笹山遺跡（註261）、塩沢町五丁歩遺跡、原遺跡（註262）、魚沼市清水上遺跡、原・居平遺跡（註263）、小千谷市城之腰遺跡（註264）、長岡市馬高遺跡（註265）、岩野原遺跡（註266）、中道遺跡（註267）がある。

これらの中期環状集落は、大木7b式並行期から形成される場合が多い。清水上遺跡（第131図1）や五丁歩遺跡（第131図2）、馬高遺跡などが代表的な事例である。これらは中央広場を中心に、円形の住居や長方形住居が並存して集落を構成するのが特徴である。特に長方形住居跡の主軸方向には中央広場への求心性が見られるが、円形の住居跡には求心性は認められない。フラスコ状土坑は、清水上遺跡で83基、五丁歩遺跡は47基が検出されており、集落間での格差が認められる。大規模な廃棄場は、五丁歩遺跡では確認されていないが、清水上遺跡では集落西側で確認される。また環状集落の内側にある中央広場に配石を伴う事例がある。例えば、五丁歩遺跡では中央広場に環状に礫が雑然と並んでおり、清水上遺跡では中央広場の縁辺部から「く」字状の配石が検出されている。墓坑は、五丁歩遺跡では中央広場に群在しているが、清水上遺跡では住居分布域に散在しており、明確な墓域の形成は認められない。



第 131 図 信濃川流域の中期集落の事例

この両集落は大木 8a 式並行期の古段階をもってほぼ廃絶する。

一方で、大木 8 a 式並行期新段階に環状集落が新たに形成される事例が多く、これらのほとんどは中期終末まで継続する。例えば、沖ノ原遺跡、堂平遺跡、笹山遺跡、原遺跡（第 131 図 4）、岩野原遺跡（第 131 図 3）、原・居平遺跡がある。これらの集落構造の特色は、中央広場を中心に卵形住居と長方形住居が並存して環状集落を構成する。住居跡の主軸方向は、長方形住居跡の場合は中央広場への求心性が強いが、卵形住居跡の場合は集落によって多様である。例えば、堂平遺跡や中道遺跡、岩野原遺跡では主軸方向が求心性を示しているが、原遺跡などでは求心性があるものとなないものが認められる。また墓域は中央広場に形成される場合と居住域に散在して墓域が不明瞭なものがある。例外的な事例として、城之腰遺跡は中期末葉に集落が形成されて、3 群の墓域を中心に集落が形成される。城之腰遺跡の報告者は集落 A⇒集落 C⇒集落 B へと変遷すると想定している（註 268）が、この解釈には幾つかの問題がある。ここでは詳述しないが、基本的に中期末葉の集落と後期初頭～前葉の集落を分けて考える必要があるだろう。次にフラスコ状土坑は集落によって検出数が大きく異なり、なかでも堂平遺跡・中道遺跡・岩野原遺跡では中央広場の周囲に群集している。この時期の特色の一つとして大規模な廃棄場が認められる。この大規模な廃棄場は、道尻手遺跡に加えて岩野原遺跡がある。中道遺跡でも廃棄域に相当する遺物集中域が集落の外縁部に存在することが指摘されている（註 269）。しかし、道尻手遺跡や岩野原遺跡では、大木 8 b 式並行期まで存在した廃棄場が、これ以降小規模化するか不明瞭になり、中期末葉の集落では大規模な廃棄場が形成されない傾向がある。

このように中期の環状集落には、中央広場・住居分布域・廃棄場に加えて墓坑・フラスコ状土坑が群集もしくは散在し、ある程度の空間区分の存在が窺われる。このような集落構造について、小熊博史は中道遺跡の分析から、「重帯構造」と「分節構造」の存在を指摘し（註 270）、石坂圭介は魚沼地域の集落を分析するなかで「分節」や「重帯」など概念を用いている（註 271）。このような「重帯構造」や「分節構造」は、谷口康浩が南関東の集落遺跡について指摘したものである（註 272）。今後、集落の空間分割について検討する必要があるが、それほど単純なあり方をしていないようにも思われる。つまり、集落構造を把握する場合に集落の範囲というものが問題になる。信濃川流域の環状集落を見てくると、複

No	遺跡	河川	時期										No	遺跡	河川	時期												
			II	III	IVa	IVb	Va	Vb	VIa	VIb	VII	VIII				IX	II	III	IVa	IVb	Va	Vb	VIa	VIb	VII	VIII	IX	
1	八反田	信濃川											22	幅上	信濃川													
2	沖ノ原	信濃川											23	徳右エ門山	信濃川													
3	反里口	信濃川											24	中道	信濃川													
4	上正面かみ	信濃川											25	城之腰	信濃川													
5	堂尻	信濃川											26	大平	信濃川													
6	道尻手	信濃川											27	岩野原(中期)	信濃川													
7	道下	信濃川											28	岩野原(後期)	信濃川													
8	下モ原Ⅱ	信濃川											29	中道	信濃川													
9	下モ原Ⅲ	信濃川											30	千石原	信濃川													
10	城林	信濃川											31	川久保	魚野川													
11	午肥原	信濃川											32	五丁歩	魚野川													
12	堂平	信濃川											33	原	魚野川													
13	芋川原	信濃川											34	万篠寺林	魚野川													
14	森上	信濃川											35	宮下原	魚野川													
15	布場	信濃川											36	水上	魚野川													
16	小坂	信濃川											37	柳古新田下原A	魚野川													
17	野首	信濃川											38	大清水	魚野川													
18	笹山	信濃川											39	清水上	魚野川													
19	川治上原B	信濃川											40	原・居平	魚野川													
20	栗ノ木田	信濃川											41	正安寺	魚野川													
21	つつじ原B	信濃川											42	古長沢	魚野川													

<凡例>

土器

住居少

住居多

第 132 図 集落遺跡の継続表

数の段丘面にわたるものや谷や廃棄場などを挟んで集落が広がる事例が見られる。例えば、道尻手遺跡と堂尻遺跡は同時期の住居が段丘を違えて 300 m 離れた位置にある。また原遺跡の沖ノ原式期の集落は、谷を挟んで五丁歩遺跡の調査区内まで広がりを見せている（註 273）。清水上遺跡では、環状集落と廃棄場を挟んで大木 8 a 式並行期古段階の住居が存在し、同様に岩野原遺跡では大木 8 b 式並行期の環状集落が廃棄場をはさんで展開している。このように住居は谷を挟んだ隣接地などに分布することも多く、これに水場などの日常生活の場を組み込んだ場合に集落範囲は重要な問題である。

2) 縄文中期集落の継続性と断絶

これらの環状集落の多くは大木 7 b 式並行期に形成されて、大木 8 a 式並行期古段階に廃絶するケースが多い。一方で、大木 8 a 式並行期新段階から開始されて中期終末で廃絶するケースも多い（第 132 図）。大木 8 a 式並行期新段階に一つの画期があると見ることができる。このような集落の廃絶は、何らかの要因で集落が放棄されて、新たな場所に集落が形成された結果であると考えられる。このような放棄を伴う移動を考古資料から示すことは難しい。例えば、五丁歩遺跡と原遺跡は谷を挟んで隣接した環状集落であり、前者は大木 8 a 式並行期古段階で廃絶し、後者は大木 8 a 式並行期新段階から集落が形成されている。このことから前者から後者へと移動した可能性が想定される（註 274）。同様な事例として、岩野原遺跡では中期集落に隣接して後期集落が形成され（註 275）、福島県法正尻遺跡では中期前半期と後半期の環状集落が約 60 m 離れて存在している（註 276）。これらは土器編年において、ある程度の連続性は認められるが、集落の廃絶と開始という現象面を解明するためには、ある一定範囲の地域もしくは遺跡群のなかで評価していく必要があるだろう。道尻手遺跡の占地期間は周辺遺跡に比べて、長期間にわたっている。このように長期間の占地を可能にした背景には、立地条件が良好であったことが考えられる。

3) 縄文時代後期前半期の集落構造

縄文後期前半期の集落遺跡は、大規模な拠点集落と住居が 1、2 軒のみの小規模集落がある。拠点集落としては、津南町堂平遺跡、十日町市栗ノ木田遺跡（註 277）、野首遺跡（註 278）、塩沢町原遺跡、万條寺林遺跡（註 279）、南魚沼市柳古新田下原 A 遺跡（註 280）、小千谷市城之腰遺跡、などがある。

この時期の集落遺跡では、柄鏡形住居や敷石住居などの住居形態が出現する。これらは竪穴が明確ではないために平面形や柱穴配列など不明なものが多いことから、集落構造は明らかではないのが現状である。例えば、原遺跡は中央広場を中心に環状集落が形成されているとされるが（註 281）、中期の環状集落と重複していることから後期前葉の集落構造は明確ではない（第 133 図 1）。また城之腰遺跡は、3 つの環状集落が集落 A ⇒ 集落 B ⇒ 集落 C と変遷すると考えられている（註 282）。しかし、城之腰遺跡の場合も中期末葉の集落と重複しており、後期前半期の遺構分布からは明確な集落構造は読みとれない（第 133 図 3）。

一方、この時期の集落には長方形柱穴列が構成要素として顕在化する。新潟県内の長方形柱穴列は、縄文後期初頭に出現し、後期前葉になると事例が増加すると考えられる。特に城之腰遺跡では、検出された長方形柱穴列 89 基のうち、ほとんどが後期初頭から前葉にかけて造営されたものとされている。この他に原遺跡では、後期前葉の長方形柱穴列が環状にめぐらされるようである。

また、この時期の集落は大規模な配石遺構を伴うケースが多い。配石遺構の種類は、環状列石や列石遺構、配石墓などがある。環状列石の事例は堂平遺跡があるが、整理途上にあるため明確な造営時期や集落構造は明らかではない（註 283）。野首遺跡は概要報告のみであるが、列石遺構に伴って配石遺構がまとまっ



第 133 図 信濃川流域の後期集落の事例

ている。これらの大規模配石遺構の多くは配石墓を伴っており、配石墓がある程度のまとまりをもって墓域を形成している。野首遺跡の配石遺構は下部遺構を持たないものが多く（註 284）、単純に配石墓群とは捉えられないようである。このように配石遺構の全てが埋葬施設というわけではなく、明らかに配石下部に墓坑を伴わない配石遺構が存在している。後期前葉の集落における配石遺構のあり方は多様であり、城之腰遺跡のように大規模な配石遺構をほとんど伴わない事例も存在している。

一方、いわゆる「盛土遺構」に類似する事例がある。例えば、城之腰遺跡では廃棄場に地山（黄色土）が堆積している。報告者はこの黄色土の堆積について、「村づくり→定着生活→集落の放棄」のサイクルのなかの「村づくりの土木工事による排土」とであると解釈している（註 285）。この他の事例は未報告であるが、中里村中島遺跡でも後期前葉期の盛土遺構が検出されている（註 286）。これらは大規模な土地造成が行なわれたことを示す痕跡であると考えられる。近年、千葉県などの南関東地方で、事例が増加している盛土遺構（註 287）との直接的な関連性は不明であるが、大規模な地山の掘削を伴う土地造成という点で、共通した特色であると考えられる。

この他に溝状遺構は、道尻手遺跡の事例以外では見られない。このような溝状遺構は水の利用と関わるものと考えられ、縄文時代後・晩期に水場遺構が増加することと関連している可能性がある。このように後期初頭から前葉期は集落構造がいまひとつ不明ではあるが、集落を構成する要素は一変するようである。

4) 縄文後期の継続性と立地

信濃川流域における後期前半期の大規模な集落は、道尻手遺跡や原遺跡、城之腰遺跡などの集落遺跡は、中期末葉から継続的に占地されている。これに加えて、三十稲場式期もしくは南三十稲場式期に、新たに造営される拠点集落が多い。例えば、栗ノ木田遺跡や柳古新田下原 A 遺跡がある。また中期末葉から継続しているように見える集落も、遺構組成や集落構造に連続性が認められないことから、中期末葉から後期初頭の間で一時的に断絶している可能性も否定できない。いずれにしても、この時期に集落構造の変化があることは明らかである。また、これらの拠点集落の多くは、南三十稲場式期もしくは加曽利 B1 式並行期に廃絶する。

これらの立地は、縄文中期が基本的に台地上や河岸段丘上に拠点集落が形成されるのと同様に、後期も台地上に形成される傾向がある。従来の研究では、縄文後期になると遺跡立地が低地化するとされている。しかし、この時期の集落立地は、単純に低地もしくは河川氾濫原などへの占地傾向を示すものではない。この時期の集落の放棄と新たな集落の造営の背景については、今後解明していく必要がある。

3. まとめ

道尻手遺跡と信濃川流域の縄文中期から後期前半期の集落について検討を加えた。道尻手遺跡の集落構造の特色は周辺遺跡と多くの点で共通性が見られた。これらをまとめると以下のような特色があげられる。

<縄文時代中期前葉～末葉の集落>

- (1) 住居形態は、長方形住居と円形の住居（卵形住居）が並存して集落を構成している。
- (2) 住居跡の主軸方向、特に長方形住居跡には中央広場への求心性が見られる。
- (3) 中央広場は、墓坑群が分布するものと遺構空白域となるものがあり、出土遺物は稀薄である。
- (4) フラスコ状土坑は、散在する場合と中央広場の周辺に群在する場合がある。
- (5) 大規模な廃棄場が集落の周囲の斜面地や窪地などに形成される場合が多い。
- (6) これらの環状集落の継続時期は、大木 7 b 式並行期に開始されて、大木 8 a 式並行期古段階で廃絶する場合が多い。また大木 8 a 式並行期新段階に新たに環状集落が開始される事例が多く、これは中期末葉まで継続する傾向がある。

<縄文時代後期初頭～中葉の集落>

- (1) 住居形態は、敷石住居に加えて柄鏡形住居の系統にある竪穴住居が存在している。
- (2) 長方形柱穴列が集落の構成要素として顕在化する。
- (3) 大規模配石遺構が増加し、集落によって多様であるが、環状列石や列石遺構、配石墓などがある。
- (4) 集落の立地は河岸段丘などの台地上に形成される場合が多く、中期末葉から継続的に集落が形成される場合と、後期に新たに形成される事例がある。
- (5) 廃棄場などで、土地造成に伴う地山土の堆積が認められる。

このように縄文時代中期前葉から後期前半期の集落の様相が認められる。今回示した特色は比較的大雑把な特色であり、今後はより細かな時間軸をもとに詳細な検討が必要になるだろう。